

## 無言の対話

しかし、私を驚かせたのは自然ばかりではなかった。初めは興味本位で見ていた村人たちの生活も、ささやかではあったが診療活動を通して身近になるにつれ気が重くなる事が多くなった。我々は連邦政府の観光者から住民の診療拒否をしないように申し渡されていたので、みちみち病人を診ながらキャラバンをつづけていた。我々が進むほど患者達の群れは増え、とてもまともな診療が出来るものではなかった。有効な薬品は隊員達のためにとっておかねばならぬ。処方箋をわたしたとてそれがバザールでまともに手に入るとは思われない。結局、子供だましのような仁丹やビタミン剤を与えて住民の協力を得る他はなかった。

ある時、咳と咯血で連れてこられた青年がいた。父親が治療を懇願した。診ると明らかに進行した結核だったので、直ちに町へ下りて病院でちゃんとした治療を受けるように申し渡した。ところが、父親いわく、

「町でちゃんとした治療が受けられるなら、わざわざ2日もかけて先生のところまでこない。第一チトラルルやペシャワールに下るバス代がやっつとで、病院に着いても処方箋だけ貰ってどうせよと言うのか」

これには返す言葉がなかった。慣れというものは恐ろしい。日本で我々が享受している医療がいかにか高価で贅沢なものであるか、保険医療に慣れきった私の理解を超えるものがあつた。山岳地帯の住民は自給自足で、現金収入は極端に少ない。都市部の現金生活者でさえ、月収はだいたい六百かた千ルピー(五千円から九千円)であるから、まず日本で常識とされる治療は不可能といつてよい。こんなところに生まれなくてよかつたと割り切ればそれまでだが、私はどうしても



それができなかった。しかも病人は彼だけではない。みちすがら、失明しかけたトラコーマの老婆や一目でらいと分かる村人に「待つてください」と追いつがられながらも、見捨てざるを得なかった。重い気持ちでキヤラバンの楽しさも半減してしまった。

休暇の都合で登頂を待たずベースキャンプを下り一人で帰途についたが、村々で歓待されると、釈然とせぬ一種の後ろめたさはかえって増幅した。

目を射る純白のテイリチ・ミールは神々しく輝いている。荒涼たる岩石沙漠に点在する緑の村々は、さながら過酷な自然にひれふして寄生する人間の鳥瞰図である。私は山と対話する。

我々は地表をはう虫けらにすぎぬ。いかなる人間の営みもあなたの前には無に等しい。しかしそれでも自分から逆らえぬ摂理というものがあれば、喜んで義理を果たすでしょう。その時の情景と無言の対話は今でも幻覚のように鮮明に脳裏に焼きついている。

それは良心の後ろめたさから解放されたいという自分の都合と、余りに見慣れない情況に気が昂ぶって感情的になっていたせいもあるろう。しかし、一時の熱ならさめましょうと割り切って山を下りた。

その後、私は憑かれたように機会をみつけてはパキスタンを訪れた。バザールの喧噪や荒っぽい人情、モスクから流れる祈りの声、荒涼たる岩石沙漠、インダスの濁流。総てこれら異質な風土も、かえってなじみ深い土地に帰って来るような不思議な郷愁にとらわれるのだった。そして、最近流行のこぎかしい日本人論を超えて、人はやはり人であるという、当然だが妙な確信を得てほっとするのである。

その後の不思議な縁の連続は、五年後にこの北西辺境州に私を呼び戻したようである。当地への赴任は最初にヒンドゥクツシュ山脈を訪れたときの一つの衝撃の帰結であった。同時に、余りの不平等という不条理に対する復讐でもあった。

